

# ～とともに～ 皆心一つに



**活動自粛による子どもたちへの影響について**  
 (全国一斉臨時休校措置に対する反応)

・適切だと思う(計) 38.5% 適切ではなかったと思う(計) 61.5%

・「適切ではなかったと思う」とはつきり否定するのは30代、40代、  
 末子が乳幼児、未就学児、小学生と小さい子がいる層に多い。

Q4. 2月22日、我が子としたるの現状、児童第一に考える、日常に長時間家などとよろ活を取らざれども、お困る(ない)こと(3月1日から本格的に)中止した。特別支援学校に臨時休校を請求した。全学年、休校期間の消費費について、あなたの心よりおもったか。あなたが男の人にいる1ヶ月もでござい、身元を譲る子どものうちはやらないままで自分のお金を使おう。あなたが女の人いる1ヶ月もでござい、

**図表2：全対象者**

性別	年齢	年齢別に見たとき			お子西日本における割合	適切でない割合(%)
		年少期	学年期	子育て期		
性別	全 体	20.5	17.3	21.2	26.4	28.1
	男 性	26.0	26.6	27.5	31.1	31.1
	女 性	14.5	17.8	23.4	24.8	37.2
	20歳以下	15.3	20.7	21.4	43.0	20.0
	30歳	17.3	22.1	21.5	48.3	41.3
	40歳以上	11.7	22.2	23.8	31.7	26.8
性別	未就学児	12.0	19.5	21.5	45.7	25.2
	乳幼児	17.1	11.4	11.4	42.2	41.7
	小学校低学年	16.7	25.0	4.2	54.2	50.3
	小学校高学年	18.3	17.9	25.3	42.9	37.1
	子育て期	27.6	37.2	20.7	34.5	44.8
	小学校低学年	13.6	27.2	19.7	46.9	49.9
性別	子育て期	36.4	18.2	18.2	37.3	50.5
	高学年	14.1	26.6	28.6	29.0	42.9
	高学年	13.8	21.5	18.2	40.5	41.3
	高学年	13.0	29.7	37.9	27.1	36.9
	高学年	11.1	27.7	22.5	29.4	41.2
	高学年	12.4	19.5	24.7	42.3	33.0
性別	未就学児	17.4	10.0	20.2	46.8	40.0
	乳幼児	11.9	15.6	15.6	33.9	26.5
	小学校低学年	16.7	22.2	16.7	44.4	35.9
	小学校高学年	26.3	20.0	29.0	46.0	40.0
	子育て期	23.7	20.0	20.0	24.3	46.7
	子育て期	24.2	16.7	29.2	39.0	45.8
性別	高学年	18.2	21.2	21.2	36.4	42.4
	子育て期	23.0	62.0	—	20.3	38.0

\*サンプル数が少く実質無効






# 学校安全ネット通信No.6 目 次

- 貞1 表紙(目次) 次回通信予告  
活動自粛による子どもたちへ影響についての集計結果表

貞2 特集 コロナ過の生活の中、感じたこととは...  
・「コロナウイルス感染とスポーツ振興センターの  
災害共済給付について」 …弁護士 細川 潔

貞3  
・「感染拡大防止策のもたらすもの  
～コロナ禍で生きる子どもたち～」 …弁護士 鹿野 真美

貞4 コラムその1 「育児とコロナ」 …弁護士 石田弘太郎

貞5 コラムその2 「育児休業取得」 …毎日新聞記者 加藤 昌平

貞6~9 特別報告 「新型コロナ感染症対応と子どもの環境」に  
関するアンケートから …区議会議員 奈須 りえ

貞10 学校安全ネットがお薦めする この一冊  
「いじめっ子・いじめられっ子の保護者支援  
マニュアル」 …弁護士 曽我 智史

# 特集



## コロナ禍の生活の中、感じたことは…

### コロナウイルス感染とスポーツ振興センターの災害共済給付について

弁護士 細川 潔



2020年8月10日、島根県の私立高校で88名ものクラスターが発生したとの報道がありました（まだ、感染者は増えているようです）。寮での生活が原因と言われています。



学校とコロナの関係については、首相から国民に対して説明があり、3月2日から一斉休校が始まりました。首相からの説明が唐突だったため、学校現場はかなり混乱に陥ったようですが、感染拡大を防止するという点では大変良い措置だったと思います。諸外国の例からしても、ロックダウンが有効であることは明白であり、今回の措置は、部分的にロックダウンを作り出したという点で、学校での感染拡大が防止されたと思っています。



しかし、学校の一斉休校が終わり、感染症に気を配っているにもかかわらず今回のようなクラスターが発生してしまいました。

感染症対策に関しては専門家に譲りますが、気になるのはスポーツ振興センターの災害共済金の給付についてです。

スポーツ振興センターのホームページを閲覧しても、コロナ感染と災害共済金の給付については言及されていませんでした

（災害共済給付契約の締結期限や共済掛金の支払期限の延長の手続きについての通知はありました）。。スポーツ振興センター災害共済給付の基準に関する規程には、「省令第22条第1号第6号の注には看護実習などにおけるウイルス性肝炎など。（注23）」と規定されており、その注には

「23ウイルス性感染症は、その因果関係の立証に難しい面があるので、給付の対象となるものが少ないが、例えば、看護実習において感染したとされるウイルス性肝炎などの場合は、現実に患者の看護に当たり、発病の原因として



その患者からの感染以外あり得ないと認められるものは給付の対象とする。」と規定されています。つまり、ウイルス性感染症に関しては、スポーツ振興センター自体が給付の対象となりにくいと認めているのです。

個々のQ&Aも出ているようですが、休校下で学校に出席した場合に災害共済給付の対象になるか否かについてのものであり、災害共済給付を認めやすくする類のものではありませんでした。

厚労省のQ&Aでは、新型コロナウイルスについて「一般的には飛沫感染、接触感染で感染します。閉鎖した空間で、近距離で多くの人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがあるとされています。」としています。このことからすると、新型コロナウイルスは感染が拡大しやすく、また、感染がわかりにくい類のものであることがわかります。

このよう状況下、従来の省令、通達に従つて災害共済給付の決定をしていたのでは、必要な人に必要な給付がなされないといった事態が生じかねません。労災の分野では、医療従事者が新型コロナウイルスに感染した場合は、原則労災と認めるという通達が出されていますし、その他の労働者に関しても「感染リスクが相対的に高いと考えられる次のような労働環境下での業務に従事していた労働者が感染したときには、業務により感染した蓋然性が高く、業務に起因したものと認められるか否かを、個々の事案に即して適切に判断すること。」とされており、一般的な感染症よりは労災を認めやすくしているようです。

スポーツ振興センターの災害共済給付に関しても、新型コロナウイルスのような場合は、一般のケースよりも学校管理下の事故ということを認めやすくする必要があると思っています。



# コロナ禍の生活の中、感じたこととは…

感染拡大防止策のもたらすもの  
～コロナ禍で生きる子どもたち～

弁護士 鹿野 真美

新型コロナウィルスは、飛沫感染するという。わかりやすくイメージすると、感染している人が電車内で口元を覆うことなくくしゃみをすると、その飛沫が吊皮に付着し、その吊皮を素手でつかんだ人が、やはり素手でおにぎりをつかみ食べると、おにぎりに付着したウィルスが体内に取り込まれる、という感じか。



というわけで、まずは、飛沫を飛ばさないようにマスクをし、飛沫が飛んだとしても届かない程度に距離を置き、何らかの拍子で手に付着したウィルスが体内に取り込まれることのないように、手指をしっかりと洗う・消毒する、という対策が勧行されることになる。



「家に帰ったら、まず、手洗い・うがい」「ご飯の前には手を洗おう。」という習慣は、筆者が物心ついたときから、やかましく聞かされていたことで、違和感はない。一方、マスク常用と「ソーシャルディスタンス」は、なじみがない。筆者にとってなじみのないこの二つの対策が長期にわたって勧行されることが、人間の成長過程に何らかの悪影響を及ぼさないか、気になるところである。

マスクについては、産まれて間もない新生児は、身近な人の顔を、下半分がマスクで覆われた状態で認知することになるのだろうか、に始まり次のような疑問が湧いてくる。口元だけが見えないという状況で、表情についての認知機能に問題は生じないのであろうか。耳の不自由な人は、マスクがあるとよく聞き取れないという話も聞くが、口元が見えることは、発語や聴力にどのような影響があるのか、生まれつき目が見えない場合と口元だけが見えない場合とでは違うのか。



「ソーシャルディスタンス」については、子どもたちとほほとほほを合わせることは許されないのでしょうか、に始まり、次のような疑問が湧いてくる。肌と肌との直接的な触れ合いは人間の情操上、重要ではないのか。大人がぐちゃぐちゃに泣きじゃくる子どもを抱きしめること、胸に飛び込んでくる子どもをしっかり受けとめることは、大切なことではないだろうか。涙も唾液も気にせずにそうしてもらえることは、子どもにとって、何よりの安心感ではないのだろうか。

また、子ども同士くんづほぐれつ取っ組み合ったり、ときにはかみついたり、そうして痛みやぬくもり、快・不快を体感していくことで、身体的な距離感覚、力加減、情感等が身についていくのではないだろうか。「手をつなぐ」、「見つめ合う」、人の体臭や体温を感じること、子どもが大人になっていく過程で、こうした経験は大切なのではなかろうか。



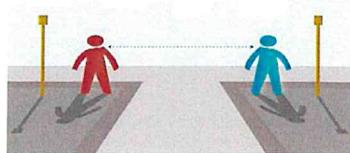
今まで当たり前だと思っていた「顔」「表情」「声」についての認知条件や身体的接触が制限される中で育っていくことが、子どもたちの認知機能や発育にどのような影響を及ぼすのか、意識していく必要があるようと思われる。そして、何らかの影響があるとしたら、それに対するどのような手当をすればよいのか、考える必要があるよう思われる。

コロナ禍がさらに長期化すれば、学校安全を考えるうえで、関係する児童・生徒がどの発達段階でコロナ禍を経験したか、ということも、今後は、不可欠な観点になってくるのではないだろうか。

有効なワクチンや薬が早く開発され、筆者の懸念が杞憂に終わることを切に願う。

## 「ソーシャルディスタンス」

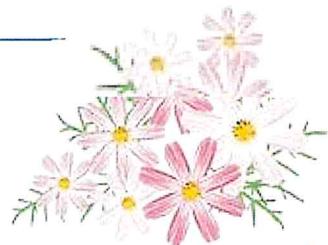
豆知識



人と人と距離のことを指しており、具体的にその距離は2Mとされています。一定以上の距離が保たれることで3密の状況を回避して、クラスターの発生を防ぐ狙いもあります。（言葉の手帳から抜粋）



# コラムその1



## コロナと育児

弁護士 石田弘太郎

今年2月ころから、新型コロナウイルスの感染拡大防止が叫ばれるようになり、様々なイベント、行事が延期になりました。

私には現在3歳9か月になる娘がおり、ようやく文章がしゃべれる年齢になってきました。今年4月には、幼稚園（年少）の入園式がある予定でした。

当然、入園式も延期になりました。6月末にあった入園式があるまで、

自宅待機になっていました。桜満開の中での入園式ではなく、梅雨の合間のカンカン照りの中での入園式になりました。



自宅待機中はどこかへ出かけることもできず、娘も退屈してしまいます。

近くの公園に遊びに行くことも憚られます。子どもが公園で遊んでいると学校等に通報する近所の方がいるという話を聞くと、余計に萎縮してしまいます。

妻は自宅にいることが多いので、テレビをよく見ており、コロナのことを私よりもよく知っています。栃木県では何人の感染者が出たとか、こんな対策をしていたとか、テレビをほとんど見ない私よりも危機感を持っています。東京にも極力いかないでほしいとも言われます。夫婦間でも、コロナ対策には温度差が出てしまいます。この点については、より慎重なほうを優先するようにしています。

娘は一番いろんなことを吸収できる時期であるにもかかわらず、自宅に籠りきりになってしまふことが可哀想でなりませんでした。大人も、外に出ることができないと機嫌が悪くなってしまいます。私が仕事に行くときなど、一緒に行くと言って聞けません。ときには、裁判所に娘と一緒に連れて行かざるを得ないときがあり、私が刑事事件の公判をやっている間に、外の廊下でユーチューブを見せて待っていてもらいました。

幼稚園からは、先生がユーチューブ動画を作ってくれて、歌やダンスを見せてくれました。私達も、できるだけ家でできる遊びを考えるようになりました。トランポリンを買ったり（体重の重い私は乗るなと言われています。）、

ビーズで遊んだり、手持ち花火をしたり、家庭の中でできる遊びをしています。

私たちにも工夫が求められています。

早く、子ども達が何も気にせず遊ぶことができる日常生活に戻ることを願っています。



好きな分量に分けてそれ  
ぞれ食用色素や絵の具を  
少量混ぜれば完成です！

らかで1麦水が入さ普塩・  
粉をられじにとボウルに小麦粉を入れて、  
21入おて好混ぜる。1くらい。適当で良し  
小麦粉(薄粉)・塩  
コネコネカップだけ！(目安)  
コネコネカップに対して水  
を足せば良し。  
柔らかくなりすぎた！と思つたら

○小麦粉粘土遊び  
○小麦ねんどの作り方  
○材料  
・小麦粉(薄粉)・塩  
・水・サラダ油  
・食用色素・水彩絵の具



○バランスゲーム



○家の遊び

# コラムその2

## 育児休業取得

毎日新聞記者 加藤 昌平

初めて生まれた長男の育児に専念するため、今年4月から1年間の育児休業を取得した。今も子育てという大変な事業に四苦八苦を続けている。今回、そんな体験をコラムに書いてほしいという依頼があったので、これまで印象に残ったこと、考えたことを報告してみたいと思う。

1歳になった長男は当初、入れ替わりで仕事復帰した妻が恋しくて涙に暮れる日々を過ごしていたが、最近は父との2人暮らしにも慣れてきたようで、ケラケラ笑いながら部屋中を走り回っている。元気盛りなので部屋中におもちゃをひっくり返し、すぐ椅子やソファーによじ登る。あちこちで転んだり頭をぶつけたりしているので生傷は絶えない。洗濯掃除、買い物など家事をしながら長男に手を焼いていると、あっという間に1日が終わり、疲れてぐったりする。  
過酷なんだろうか。もちろん苦しみたくさんある。子供の成長を誰よりもすることは何よりもうれしい。

長男が最初に覚えた言葉はなんと「パパ」だった。

一方で、育児に対する社会の理解度が低いと感じることもある。厚生労働省によると民間企業に勤める男性の育児休業取得率は2018年10月

現在で6%程度。「職場で取得できる雰囲気ではなかった」などの理由が多いという。私の職場では男性の育休取得を推進しており、比較的取りやすい。それでも、「忙しいのに育休を取るのか」と驚かれるような雰囲気を感じる時はあったし、家庭とキャリアをてんびんにかけなければならないような考え方も残っている。同業他社に勤める妻は復帰早々、部署の中でも特に忙しい持ち場を任せられ、得して子供の面倒を見ているから良い母と子にとって最も大切な時期に、いることは残念だ。



主婦の仕事はなんて  
だけでなく、喜びも  
早く身近で目撃でき



来年は育休が明けるため長男を保育園に入れる必要がある。地元市の担当者によると、ほとんどの子供が1歳から繰り上がるため、2歳の入園枠は非常に少ないと。ただでさえ待機児童問題が深刻なのに、育休を取ると子供の保育園入園が不利になるという現実が今の社会にはあるようだ。

育休を通じて得る経験は、子供のためだけでなく、自分にとっても糧になると確信している。しかし、今の社会ではなかなか育休取得率は伸びないと感じる。改善していくためには、それを問題と感じた人たちが意識的に訴えていかなければならない。



特別報告



## 「新型コロナ感染症対応と子どもの環境」 に関するアンケート

会員の奈須りえ(区会議員)から「フェアな民主主義リサーチ分科会が行なったアンケートを分析報告をいただきました。

新型コロナウイルスは、私たちの暮らしに近年にない大きな影響を及ぼしています。

私は、大田区の区議会議員をしていますが、行われる政策は、一時的な対処療法として妥当でも、長期にわたり行えば、医療や福祉（子育て・介護・障害）、教育、雇用や経済など、国民の生活、もっと言えば、議会制民主主義などあらゆる生活基盤に深刻な影響を与えることにつながると気づきました。

そこで、健康と安定した毎日の暮らしを得るために、まず現状を知ることからと考え有志で「フェアな民主主義リサーチ分科会」を立ち上げ、調査を行うことにしました。

こどもやその家族などを中心に、新型コロナウイルスの感染防止策がどのような影響を及ぼしたか、感染防止策をどう評価したか、それは、なぜだったのかを中心にきいています。

「 私たちは、大きな組織ではありませんし、資金も持たないため、アンケートの数をたくさん集めることは難しいと考え、

選択肢を

- ・ (□適切だったと思う □ほぼ適切だったう □あまり適切ではなかったと思う □適切ではなかったと思う)
  - ・ (□学校に行きたかった(行った方がよかった) □学校が休みなのは仕方がないと思った □感染が不安なので、休校でよかった)
  - ・ (□そう思う □ややそう思う □どちらともいえない □あまりそうは思わない □そうは思わない)

を選ぶにとどまらず、回答していただく方たちの、『なぜ』、そう答えたのか、という生の声を吸い上げることに努めました。

有効回収は208件と決して多くありませんが、その点が、このアンケートの特徴であると同時に、他のアンケートでは見えない部分が明らかにできたのではないかと思っています。

アンケート結果とそこから見えてきた特徴や課題についてご報告いたします。

## I アンケート結果より

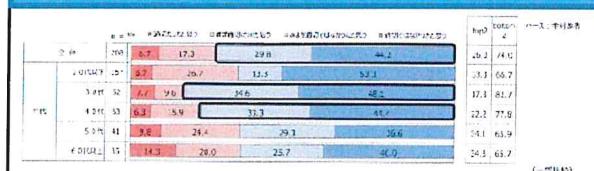
① 多くが適切でなかったと感じていた  
国や自治体の自肅要請

国や自治体の自粛要請に、74%が、適切ではなかったと感じていて、特に30代、40代に否定する人が多く、8割前後を占めていました。

アンケートを取るまで、世代により、自肅要請に大きな違いが出るとは考えていましたので、世代による違いについて、なぜなのか、常に考えながら、アンケート結果を分析しました。

## 国、自治体の自肅要請について

・74.0%が適切ではなかった。  
特に、30代、40代に否定する人が80%前後を占めた。



## ② 各感染症対策に対する反応

- ・感染症対策で、適切評価が上回るのは「3密を避ける」「不要不急の外出自粛」「公共交通機関の運休・減便」で

- ・逆にそうは思わないが上回るのは、「PCR検査」「非正規雇用者への支援」「大小さまざまな法人や経営者に対しての支援」

- ・「飲食店、商業施設、スポーツジム等への休業要請」「図書館、美術館、博物館や公共施設の休館」「一律1人当たり10万円の特別定額給付金支給」は賛否が分かれました。

- ・そして、半数強が自肃要請により「日常当たり前のことができなくなって、個人の自由が奪われた」と感じています。

### ③ PCR検査

PCR検査の政府対応については、適切と思わないと答えた人は71.6%でした。



評価しない理由は、大きく二つに分かれた。

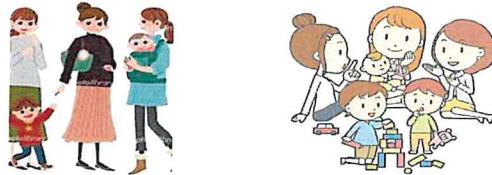
- ・病院がパンクするから検査をセーブするのは本末転倒・PCR検査が少なく、検査を受けられないこと・検査を受けられることで症状が悪化したという報道があった・子どもが熱を出した場合に不安、といった検査しないことへの不満から政府や自治体の対応を適切ではないと思うとする回答がある。

一方で、・無症状の人にまで検査を行う必要はない・PCRが何たるかを説明せず、正しい判断ができる状況を作らなかつた・ウイルスを検出

調査方法	Wed
調査対象者	SNSでの拡散及び機縁による協力依頼で、有効回数は208件。

する検査でないため検査の意味がない・税金の無駄遣い・無症状者までPCR検査して、健康な人を病人に仕立て上げる事に何の意味があるのか、といった、PCR検査そのものの信ぴょう性や正確性への疑問から適切ではないとした人に分かれました。

PCR検査は短期間に数百万倍など増幅して陽性かどうかを見る検査であることからの疑問でした。

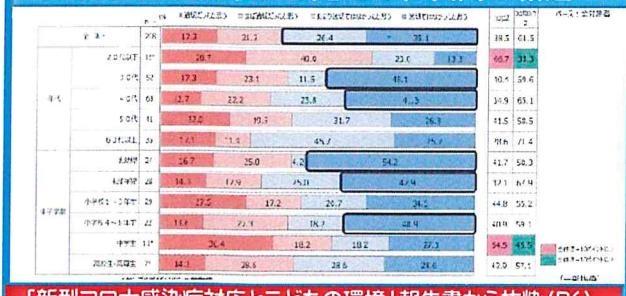


#### ④ 一斉臨時休校措置

全国一斉臨時休校措置に対し、適切38.5%、適切ではなかった61.5%と、否定評価が上回りました。特に30代、40代、末子が乳幼児、未就学児、小学生など小さい子のいる層に「適切ではなかったと思う」と明確な否定が多くなっていました。

適切でないと答えた人々は、子どもたちが楽しみにしていた卒業式も最後の学校生活も奪われたり、給食がなくなることの悪影響とこどもたちのメンタル面のフォローが全くなかったり、子どもたちは休校、親は通勤している不可解、一番リスクの高い層を隔離する意義は何だったのか、一方でデイサービスや介護サービスは通常通り。「やっている感」で決めたとしか思えず、被害者はこどもたち、といった否定的な意見が見られた一方で、おかげで感染せず、その心配もなく過ごせた、夫が病気なので子どもを守るために、強制力が必要、わからぬことが多いとのことで3月は仕方なかった、といった肯定する意見も、手放して評価する意見と未知のウイルスだったため仕方ないといった条件付きの意見とにわかれました。

#### アンケート結果から見える世代間の相違



「新型コロナ感染症対応と子どもの環境」報告書から抜粋(P6)

#### ① 臨時休校

臨時休校時、43.5%が「学校に行きたかった（行ったほうがよかったです）」と答えています。「休みなのは仕方ないと思った」は23%。「感染が不安なので、休校でよかったです」は24.3%にとどまります。特に、30代、40代に、子どもは「学校に行きたかった」が多く、30代は半数以上の56.8%、40代も47.5%を占めています。

●学校が休みで困ったこととしては、7割が「友だちや先生に会えなかった」をあげ、続いて「授業が受けられなかった」が6割、以下「学校行事ができなかった」「給食・食事がなかった」「学校の施設や校庭が使えなかった」が4割。

●休校中、学校や行政から欲しかった支援は、「オンラインでの学習支援・フォロー」「子どもどうしの交流」「子どもの居場所の提供」が5割前後、「子どもの心のケア」「みんなで学べる工夫」が4割前後。30代は「子どもどうしの交流」を一番求めていました。

●未就学児の休園、登園自粛中に欲しかった支援は、「子どもどうしの交流」「子どもたちの心のケア」「子どもの居場所の提供」が5~6割を占め、以下「保護者どうしの交流」「園での取り組みについての意見交換」が3割台。

●自粛・休校期間中でも利用したかった公共施設は、「図書館」「地域の公園・遊具の使用」「校庭」「学校の図書室」が上位になっていました。

#### ⑤ 臨時休校時の子どもの様子

小さい子どもの方が外出頻度が多かった傾向にありました。

●自粛、休校期間中、平常時より時間をかけるようになったのは「スマホやパソコンを使う」「テレビを見る」「家族と会話をする」「家の 中で遊ぶ」など。逆に、かける時間が減ったのは「友だちと会話をする」「体を動かす」「公園や家の近くなど、外で遊ぶ」こと。30代に「友だちとの会話」の減少を指摘する率が高く82.6%を占めました。

●自粛、休校期間中の変化としては、「運動不足」「体力が落ちた」「夜更かし」「朝寝坊」が4割以上、他に「太った」「食事時間が不規則」「不安を感じている」「甘えるようになった」が2割台で、からだも生活のリズムも心の状態も、何らかの変化を感じている人が大多数を占めました。

#### 臨時休校時の子どもの様子

- ・臨時休校時、「学校に行きたかった（行った方がよかったです）」と答えていた。「休みなのは仕方ないと思った」は23.0%
- ・「感染が不安なので、休校でよかったです」は24.3%
- ・子どもは「学校に行きたかった」が30代では56.8%40代でも47.5%



#### ⑥ 個人情報と感染予防

●個人情報を管理して積極的に感染を予防することについて、「感染症を抑えるためには必要なことだと思う」が8.2%、「個人情報がしっかり保護されるなら、よいと思う」が24.0%と、感染予防のために容認は32.2%。一方、「個人情報が他にも使われるのではないか心配」が26.0%、「感染症対策であっても、個人情報を勝手に利用するのは反対」が32.2%と、感染予防ではあっても心配・反対が58.2%と6割近い。特に、40代以下に、感染予防であっても個人情報を利用することへの警戒が大きい結果になりました。

**II 年代で別れた感染症対策への評価**  
30代、40代の子育て世代でアンケートの結果が他の世代と異なった部分のあることに、私たちは注目しています。

しかし、この子育て世代は、子どもの環境の変化に敏感に対応するだけでなく、休校、営業自粛、テレワークなど、公共サービスを停止・縮小し、経済活動の自粛を要請しながら、環境整備をしていない国や自治体に対し否定的な回答が多いのが特徴です。

そこで、リサーチ分科会では、この世代が他の世代に比べ、政府の施策に敏感なことについて、次のように考えてみました。

今後、政策に反映させていくための重要な部分だと思いますので、ぜひ、みなさまのご意見もうかがい、議論を深めていきたいと考えています。

30代、40代は、子育て中の世代でもあり、また、派遣や非正規雇用など、働き方が大きく変わった影響をも大きく受けている世代であります。このことが、正規雇用、終身雇用を中心だった時代に入社し、すでに、退職し年金生活、子育てを終えている世代との違いになって表れているのではないかと考えました。

- ① コロナの影響を受け雇用や所得に不安がある。
- ② 子育てや教育などで、まだまだお金がかかる。
- ③ バブル崩壊後の経済が悪化したあとに社会に出ており、雇用や所得に不安がある。
- ④ 住宅ローンを抱えている。あるいは、今後、住宅をどうするか迷っている。

一方、それ以外の比較的上の世代は、年金の多い少ない、など間接的な影響はあっても、コロナで、直接年金が減らされる心配は今のと

ころありません。こうした、生活の実感が、アンケートの結果に表れているのではないでしょうか。

### III 新型コロナ問題を抱える私たちの暮らしとICT



移動の制約を解決し感染防止をしようとする試みとして、ICT技術を使った位置情報の把握による感染拡大防止のためのシステムを採用しようとする動きがあります。

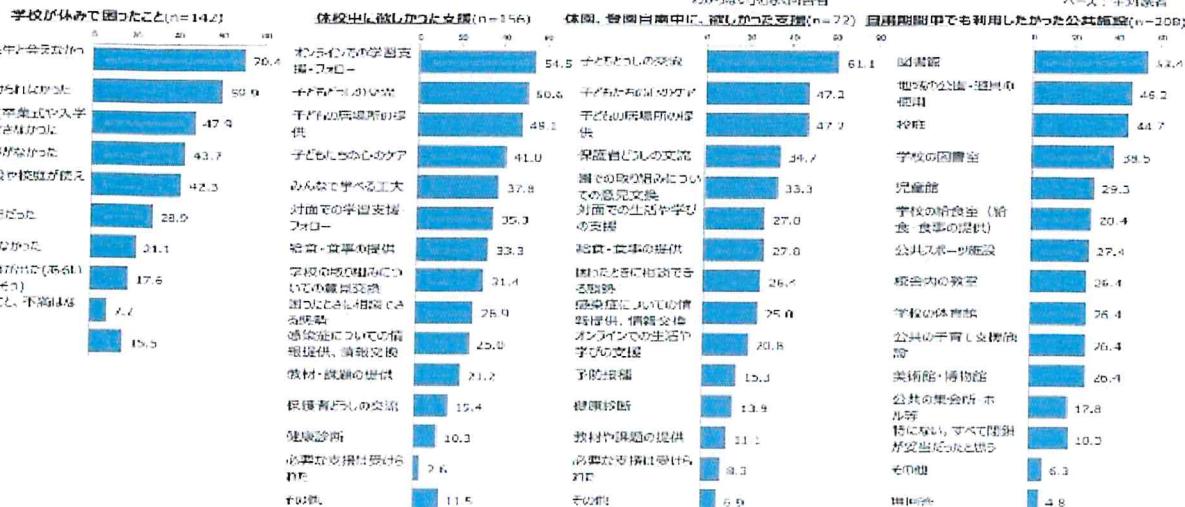
私たちの健康への不安や、経済、教育、文化など総合的に考え、生きていくために、と導入を求める声もあります。

アンケートでは、感染症を抑えるためには必要なことだと思うが8.2%、「個人情報がしっかりと保護されるならよいと思う」が24%で、合わせて32.2%が感染予防のために個人情報を管理して感染予防することを容認していますが、「個人情報がほかにも使われるのではないか心配」26%、個人情報を勝手に利用するのは心配・反対が58.2%と6割近くになります。ここでも、50代以上より、40代以下に、感染予防であっても個人情報の利用を警戒する人が多いという結果が出ています。

同時期に法改正されたスーパーシティは、大資本に行政情報やマイナンバーなど個人が特定されない形で管理されている個人情報を企業に使わせ経済活動を許しており、コロナの感染拡大防止で行政に使用を許した情報が、結果として営利目的に使用される可能性も出てきています。



- 学校が休みで困ったこととしては、「割がけ友たちや先生に会えなかった」をあげ、続いて「授業が受けられなかった」が4割、以下「学校行事ができない」「給食・食事がなかった」「学校の施設や校庭が使えないかった」が4割。
- 体校中、学校や行政から欲しかった支援は、「オンラインでの学習支援・フォロー」「子どもとの交流」「子どもの居場所の提供」が5割前後、「子どもの心のケア」「みんなで学べる工夫」が4割前後。30代は「子どもとの交流」を一番求めている。
- 未就学児の休園、児童自園中に欲しかった支援は、「子どもたちの父兄」「子どもたちの心のケア」「子どもの居場所の提供」が5~6割を占める。以下「保護者どうしの交流」「園での取り組みについての意見交換」が3割台。
- 自粛・休校期間中でも利用したかった公共施設は、「図書館」「地域の公園・遊具の使用」「校庭」「学校の図書室」が上位に。





(一部抜粋)

適切だったと思う	適切ではなかったと思う
<ul style="list-style-type: none"> <li>・この施策が効果的だったとは、後の分析待つ必要がありますが、現時点での感染者数・死亡者数の伝おどりから、一次的な人の命を守る措置としては適切と評価するところです(男性50代)</li> <li>・医療崩壊を防ぐため(女性 60代)</li> <li>・自肃をした事により、接種機会が減った。皆んなの自覚もできただから(女性 50代)</li> <li>・学校の休校 자체は上がり得ない判断だと思いますが、休校後の情報提供のスピードなど、学校間でも差が出ているようござじる(女性 50代)</li> <li>・要請がなければ感染が広大したと思う(女性 70代以上)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PCR検査数のあまりに少ないと(男性 60代)</li> <li>・今回のコロナ感染症に対する政府の対応が不透明の中で何故自粛しなければならないのかの説明が不十分だった(女性 70代以上)</li> <li>・運動に対する考え方(女性 40代)</li> <li>・緊急事態宣言はやりすぎ。インフレインサバゲー率的に大きめで、それによって経済が止まり、失業者が増えた。崔眞洙はいいところではない(女性 30代)</li> <li>・当初は仕方ないところもあつたが、過剰な自粛要請だった。市民に不安を与える情報ばかり提供してきた(男性 20代)</li> <li>・自粛は国民の命を生んだ(男性 40代)</li> <li>・矢張りの伝染病に対して自粛は仕方ないが、対策が後手後手。もし先手で取り組めば、被害は抑えられたと思います。また、この期に及んでまだ利権かよ? !と思わざまがあったこと、医療への支援が希薄であることが残念(女性 30代)</li> <li>・自嘲調門が長きました。5月以降の近頃は失敗だったと思います(女性 40代)</li> <li>・コロナのリスク比べ、自肃による経済的リスクの方がかるに大きいのは、最初から予想できた事だ。自粛要請による人が経済的に不利益を被ってしまった(女性 50代)</li> <li>・休業賃貸が伴わない自粛要請。また、事業者任せで、ステイホームが徹底されず、生販は自宅待機だがパートタイムだけ出社した日もあった。なんとも言えない差別を感じた(女性 50代)</li> <li>・非常に突然、唐突な休校要請。所得補償のない休業要請。その結果、医る人がいることを想定していない、切り離してもいいと判断したくはない自粛要請だ(女性 60代)</li> <li>・全国一斉休校要請が間違いのもどった。その後はなし崩し的に過剰反応。科学的な知見を取り入れていたのが全く疑問(女性 30代)</li> <li>・安易に休校すべきではなかったと思う。学びを止めてしまうと、必ず何処か口上寄せが行き、負担を強いるのは子供たち(女性 30代)</li> <li>・子どもへの悪影響もよく検討せず、いきなり学校を休校して子どもたちの大切な学び育ちの時間を失ったこと。それに、これは無理矢理、重複化仄々されとわかってきていたのに、延長されたこと。我々の子どもへの虐待これができない学校での過度の感染防止対策(女性 40代)</li> </ul>



「新型コロナ感染症対応と子どもの環境」に関するアンケート結果報告書 2020年9月

発行 フアーナ民主主義リサーチ分科会 坂下泰子 藤原精子 匠田望 奈須りえ

連絡先 東京都大田区中央2-11-5 03(6303)8671 fairmin2020@gmail.com

領価 1200円

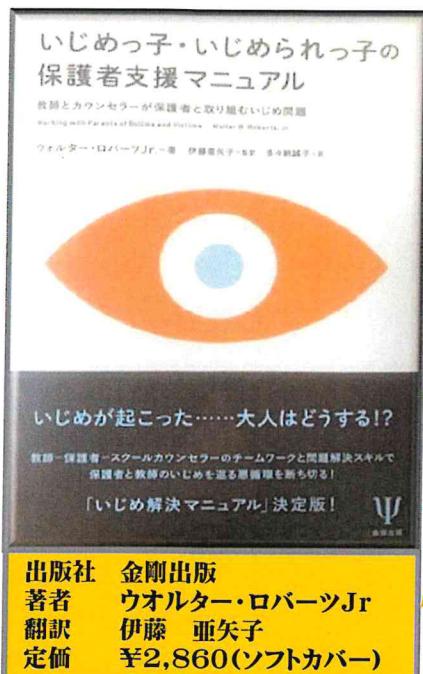
区議会議員奈須りえさんの特別報告に挿入されている表等は、「新型コロナ感染症対応と子どもの環境」に関するアンケート結果報告書2020年9月から抜粋したもので

★ 報告書は領価¥1200円です。

お問い合わせは [fairmin2020@gmail.com](mailto:fairmin2020@gmail.com)

# 学校安全ネットがお薦めする

## この一冊！ Vol.4



いじめが起きた大人はどうする？

### いじめっ子・いじめられっ子の 保護者支援マニュアル

教師とカウンセラーが保護者と取り組むいじめの問題



できないことを正直に認める④保護者とのオープンで持続的な対話を促進するなど、教員が心がけるべき6つの原則を指摘する。また、いじめられた子どもの保護者と教員とは、「自滅的な緊張のサイクル」に陥りがちであり、このサイクルを打ち破ることが重要である。

いじめた子どもの保護者への対応に関する具体的な対話例を紹介している。例えば、「（あなたの子どもには）学校ではそんなこと（いじめること）をしてはいけないということを、学んでもらいたいのです。」「これから、（あなたの子どもに）行動を改めてもらうためには、あなたからのサポートも必要です。」などである。いじめた子どもの保護者への対応に関して、学校が採るべき基本姿勢が述べられている。

本書を読むと、文部科学省が推進する「チーム学校」には保護者に参画してもらうという視点が薄弱ではないか、いじめ防止対策推進法8条には「保護者」との連携を図ることが明文化されているが、現実の学校現場には保護者と丁寧に対話できる教員がどの程度いるのかなどの疑問が次々に湧いてくる。

学校の現状につき批判的検討をする際に、啓発的視点を提供してくれる一冊である。

弁護士 曽我 智史

### ☆NPO法人学校安全全国ネット入会の御案内☆

私たちの活動は、皆さんの会費で運営しています。

学校安全に関する相談をはじめ、当会の事業に対し  
ご理解・ご賛同をいただきますよう、お願い申し上げます。

年会費 ★会員 3,000円 ☆賛助会員 5,000円

郵便為替でのお手続きは、以下までお願い致します。

振込先 00130-9-346463

加入者名 ヒエイリ)学校安全全国ネットワーク

★『安全ネット通信』刊行元・お問合せ先  
学校安全全国ネットワーク

TEL 03-3511-5070

FAX 03-3511-5784

E-mail [uta@yoko-no-heya.jp](mailto:uta@yoko-no-heya.jp)

HP <http://gakouanzen-network.com>



事務局所在地

〒102-0072

東京都千代田区富士見

2-7-2

ステージビル1706号

南北法律事務所 内

